

私はずっと、私の中だけの世界で生きていた。

人よりできないことが多くて、それでも周りと同じように振る舞おうとして、ある時ふっと糸が切れたように部屋から出られなくなった。初めの頃はそれでよかった。もう自分の『できない』に苦しまなくていいんだと、どこか安心感まで感じていた。この部屋には自分と比較してしまうようなものは何もないし、誰もいない。モニター越しで見た情報が、私の世界のすべて。そんな日々も数週間、数ヶ月、数年と続けていくうちに『安心感』は『焦燥感』へと変化していった。「自分が止まっている間も周りは成長を続けている」そんな意識が重くのしかかる。早く追いつかなければいけないのに、努力しても努力しても『できない』は『できない』のまま。命を断とうとしたのはそんな理由だった。気が付けば病院のベッドの上で、「自分は死ぬことさえできないのか」点滴のついた腕を見ながらぼんやり思っていた。

入院になってしばらくは起きて薬を飲んだら寝るだけの毎日が続いた。だけど、薬を飲んでも憂鬱な気持ちは変わらなかった。ある日、看護師さんから「毎週やっている、みんなが集まって本を読む会に行ってみないか」と誘ってもらった。その看護師さんにはお世話になっていたし、気は進まないが行ってみることにした。何人かの患者と、心理士さんが一人、軽く挨拶してこの場所での過ごし方を聞いた後、自由に過ごしていい、と言われた。自由に過ごしていいと言われても、逆に何をしたらいいのか困ってしまう。気の進まないまま、本棚に並べられていた小説を手を取った。私は本に、と云うより物語に長らく触れていなかった。引きこもっていた部屋ではスマホ以外のものには触らなかったし、そのスマホで見ていたものも、記憶にも残らない、無意義な「情報」でしかなかった。私は本にあまり興味を持ってないまま開く。「どうせすぐに飽きてしまうだろう」と思っていたが、なかなか面白い。気が付けば、1時間ほど夢中で読んでいた。そのあたりで会の終了時間であることを告げられた。もう少し読み進められれば、物語の根幹に関わる重要なところがわかりそうなのに、、、、しょうがないから、来週までは生きてみるか、と思った。

それからは、本を読む時間を楽しみに生きるようになった。最初に読んだ小説を読み終えてからも、別の小説、漫画など本棚に並べられてある本は片っ端から全て読んでいった。本の中の物語は「不思議なものが見える青年の話」だったり「次々に起きる殺人事件を解決する探偵の話」だったり「魔法の世界を生きる少年の話」だったり、さまざまな世界を私に見せてくれた。最初は物語の面白さだけで本を読んでいたけれど、読んでいくうちに徐々に、私自身にも変化が起こっていた。「終わりがわかっているのに、それでも相手を愛した少年」から人を愛する者の美しさを知った。「世界を旅し、徐々に成長していく子供達」から無情な世であったとしても、懸命に生きる者の気高さを学んだ。「ばけもの

自分を受け入れて生きていく主人公」から欠点まみれの自分を少しだけ受け入れられるようになった。本棚の本を全て読み終える頃、私は私の『できない』を少しだけ許せるようになって、目に映る世界はほんの少しだけだけれど、光が見えるようになっていた。今、私は、私があの日々で見たような人の救いになることができる物語を描くため、小説家を目指している。いつか、私の描く物語で誰かの世界を照らせたならば、私にとってそれ以上の幸せはない。